

20年目のきょうも、
人と地球にやさしいアクション!

共生の時代

'08
11月

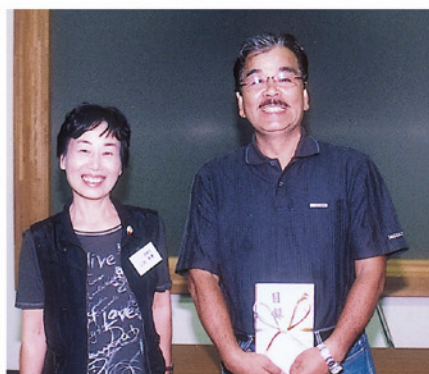
●発行:グリーンコープ共同代表理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

2008年度第一回酪農生産者交流会

思いを込めて届けられた 「生産奨励金」

世界的な穀物価格の高騰による飼料価格の高騰や牛乳の消費の減少、加工用の出荷割合の増加などから、酪農生産者は非常に厳しい経営状況に追い込まれています。グリーンコープでは、生産者に酪農をずっと続けてもらうために、そして私たちが産直びん牛乳を飲み続けるために、産直びん牛乳の価格に「生産奨励金」を加算しています。

2008年9月12・13日の「酪農生産者交流会」で第一回目の「生産奨励金」が生乳生産者に手渡されました。グリーンコープからは各単協の理事長・副理事長など組合員21人と生乳生産者約30人が参加しました。

目録を手渡した上田育恵 とつとり理事長
と生乳生産者会副委員長東敏則さん

◀組合員からの手紙を手渡す川原ひろみ かごしま理事長

「生産奨励金」って
本当にすごい!

冒頭、菊池地域農業協同組合の代表理事組合長川口司さんからは「原油や穀物の相場の高騰による生産資材の高騰、特に飼料の値上がりは酪農経営を非常に圧迫しています。その上飼料作



Contents

グリーンコープを創った人たち(8)	
グリーンコープ福祉連帯基金第二代理事長 田島 いづ子	
求めたものは魂の自由	2
～グリーンコープは日本の農業を、漁師さんたちを応援します～	
市場に出せない「さんま」が 貴重な資源に大変身!	3
特集	
酪農生産者と共に 私たちのびん牛乳を守り ずっと飲み続けていきたい	4・5
メーカー・生産者からのメッセージ(8)	
(有)大矢野原農場	
生きものを育てたい! 思い切っってはじめて養鶏の道28年は いつもグリーンコープと共にあった	6
GM作物はいらない!の思いを広げよう	
グリーンコープがめざす生活協同組合®	7
組合員・ワーカーズ・職員リレーメッセージ	
未来へつなぐ20年 私の思い	8

牛乳は、私たちにとって特別な味の深いものです。グリーンコープになる30年以上前からほんものの牛乳がほしいという組合員の思いを実現したのが産直びん牛乳です。低温殺菌牛乳の本場であるヨーロッパに組合員が行って研修し、生産者と協力しあって、パステライズ牛乳を開発することができました。その牛乳が欲しくてグリーンコープに加入する組合員もたくさんいたのです。1998年には、日本で初めての遺伝

40万人の組合員の思いを
伝えるグリーンコープ
共同代表理事
吉田文子さんの挨拶

だ、本当にすごいことだ」と、驚きと同時に感激しています。みなさんの熱い思いに心から感謝します」と挨拶がありました。

この8月に開催した、グリーンコープの新しい食べもの運動の展開をめざした学習会では、「食」が大変な状況にあることを学びました。今や農業や酪農生産にかかわる人たちが辞めてしまいたくなる経営状況です。当日の矢野さんのお話でも酪農家のみなさんの大変なようすが分かり、組合員はみんな産直びん牛乳をもっと利用して、こう、飲み支えていこう、と心をひとつにしました。

産直びん牛乳の価格は5月末から改定しました。その中から1本に付き8円を生産者のみなさんへの応援とすることを決めました。今回生産奨励金と各単協の組合員からの、酪農生産者の皆さんへのお願いと応援のメッセージを渡します。子どもたちの代になってもこの牛乳がなくならないよ

「生産奨励金」の贈呈は生産者会副代表東敏則さんに「酪農生産奨励金2457万円(4～6月分)」の目録がグリーンコープ生協とつとり理事長上田育恵さんから手渡されました。同時に、各単協の組合員から寄せられた手紙がグリーンコープかごしま生協理事長川原ひろみさんから手渡されました。手紙には、グリーンコープの組合員の産直びん牛乳やそのびん牛乳のために生産に日夜努力している酪農生産者のみなさんへの深い思いが綴られています。

手渡された第一回目の
「生産奨励金」

生産奨励金の第一回贈呈式は緊張の中にも和やかに行われ、産直びん牛乳の「安心」「安全」そして「安定」に向けた新たな取り組みの一步を踏み出しました。

20年の歴史を創った原点に戻る

グリーンコープ福祉連帯基金
第二代理事長 田島 いつ子

鹿児島から大阪まで、一つの県に一つのグリーンコープという今の形態は、2005年に福岡県にグリーンコープ生協ふくおかが生じたことにより完了した。

それまで大方の県で展開された合併のプロセスは、そこに集った人たちの関係の成熟を待つゆとりもなく、時にその関係性を荒々しく破綻させもした。が、同時に確実に鍛え上げてきた。下表のような歴史をたどってきたグリーンコープかごしま生協で、四半世紀以上も活動に身を投じてきた田島いつ子は理事長としてそれを実感しつつ、グリーンコープ連合の福祉連帯基金理事長という任を務め上げた。



求めたものは魂の自由

薩摩

田島は生粋の薩摩育ち。おじいちゃんである。同郷人の夫と結婚し、その後2年間は鹿児島を離れたことはない。名前のいつ子は五女にちなむ。妹はむつ子と名付けられ、両親は待望の跡継ぎをそこで断念した。両親に厳しく育てられたにもかかわらず田島は伸びやかな人柄である。

生協へのかかわりは、低温殺菌牛乳「だった。それを子どもたちに飲ませたくて、当時のあいら生協に子どもをキヤリーに入れて日参した。汗まみれになって田島は素の自分のままで活動に没頭した。

当時の生協というのは、良

くも悪くも人間臭いところが残っている集団だった。個人と生協の間に何の垣根もなく、「良くも」という点では、かごしまにはそれを象徴するようなエピソードがある。現グリーンコープかごしま生協を設立した92年のことだ。累積赤字は解消されていなかったが、単年度は黒字計上という朗報がもたらされ田島たち理事は喜んだ。ところが総代会の3日

理事長になる

1990年のグリーンコープかごしま生協の総代会は荒れた。総代からさま

ほど前になつてそれが間違っていたことが判明した。その知らせが届いた時、側にいた仲間の理事がこう言った。「私、定期が200万円程ある。それを取り崩そうか?」。

彼女が真顔でそう言ったのだ。

後押しされてグリーンコープ福祉連帯基金理事長に

そうしたグリーンコープかごしま生協の諸々の事情を抱えて田島が航空機で舞い降りる福岡では、組織的に整備されつつあった現グリーンコープ生協ふくおかの、そして「たがわ生協争議」を乗り越え、人間同士の関係の仕方において深みを増したグリーンコープ連合の世界が展開されていた。

例えば福祉活動組合員基金(100円基金)のプランは94年に設立された福祉連帯基金で検討が開始されたが、議題がその話に移ると田島はほとんど絶望的な気分を襲われた。そんな話を今のかごしまにどう持ち帰ればいいのか見当もつかなかった。そうした田島の不安げな表情を当時の基金専務だった行岡みち子は見逃さなかった。「田島さん、私がお話に行きましょう。いいですか」と、その場



2007年度グリーンコープ地域運動交流集会で「縁をつむぐ会」代表として挨拶をする田島さん

※グリーンコープ設立に尽力した人、それを引き継いで歴史をつくってきた人、これから運動を創造していく人、それぞれが出会い、柔軟な連帯と協同の輪をつくっていくことを目的にした会。1997年発足

活動を牽引していた組合員活動室室長(組合員事務局)との関係がきしみはじめ、ついに問題化した。「私を認めて!」と、田島はパートナリーである室長と投げ所であるかごしま理事事に向かって悲鳴をあげたのだ。

理事長、室長の関係のみならず、専務も加えた三役の関係の仕方が浮き彫りになった。連合も解決に向けて動き、理事会のあり方も問われた。当時かごしま専務だった大坪は、事件を契機に理事会にまっすぐ向きあった。そして行岡(当時連合専務)の「この問題は私たちの状況がすみ、すすんだ中で未分化だった理事長と室長、あるいは委員長と活動室が分化する」という軌轢である」という言葉に納得する。

事件は数ヶ月で収束した。しかし、活動室7人のうち5人がこの事件に深く傷つき、その傷が癒えぬまま辞任した。田島も理事長を辞任し、後任理事長(真田龍子)を支えるという立場で理事(支部委員長)を2年務めた。

その後の田島は福祉ワーカーズ「げんきママ」でヘルパーを1年経験し、現在は親の介護をしつつ、グリーンコープかごしま生協の監事を引き受けている。グリーンコープの商品で育った3人の子どもたちも皆成人した。先日末子の22歳になる二女が、同乗した車の中で唐突に田島に言った。「お母さん。グリーンコープって深いね。」

何か思うところがあつたのだろうか。「どこか?」とは聞き返さなかった。

「私を認めて!」

1998年初頭、かごしまで起こった「事件」は、田島の内的成長とも言える変化を背景にしていた。二人三脚でかごしまの組合員

私たちのびん牛乳を守り 続けていきたい

グリーンコープの牛乳は殺菌方法から母牛に与えるえさへのこだわり、そしてびん牛乳へと進化を続けてきました。さらにグリーンコープは日本の酪農を応援したい、理想のびん牛乳をずっと飲み続けたいとの思いから、びん牛乳の価格改定を契機に生産奨励金を生産者に届けることにしました。

グリーンコープの食べもの運動のシンボルであるびん牛乳を守り育てるために、これまで以上に生産者を応援する産直の関係づくりをすすめていきます。

さらに安定して産直びん牛乳を飲むために

私たちの牛乳はすばらしい！

グリーンコープの牛乳は生乳の風味や栄養をそのまま残すことができるように、パスチャライズ殺菌（72℃15秒）や脂肪球を均一化しないノンホモゲナイズをしています。さらに1998年にはトウモロコシなどの飼料をnon-GMO（遺伝子組み換えしていない）に全面変更し、より安心・安全な牛乳となりました。

また、容器をびんにするために日本ミルクコミュニティ（株）の協力を得てグリーンコープ専用のびん牛乳工場をつくり、2003年11月「びん牛乳」が誕生、グリーンコープの食べもの運動の一つの到達点となりました。

2008年11月、誕生から5年目を迎えた「産直びん牛乳」はグリーンコープの食べもの運動の象徴として愛され、グリーンコープの中に定着してきました。

社会状況の劇的な変動が酪農生産者やメーカーを苦しめている

しかし一方で、世界的な穀物価格の高騰等が酪農生産者を襲い、原乳の生産コストが上昇しています。オーストラリアの大干ばつなど、世界各地の異常気象によるトウモロコシの生産量の減少、バイオ燃料向けのトウモロコシ需要の急増、中国など新興国の急速な経済成長に伴う食料需要の増加、また、原油価格の高騰などによる輸送費用の上昇

などさまざまな状況が飼料価格に影響を及ぼし、生産者を苦しめています。グリーンコープは日本ミルクコミュニティ（株）と、びん牛乳の価格設定から適正価格を相談しながら決定してきました。原油価格の高騰による製造経費（燃料費、運送費、包装資材など）の増加によって、メーカーの状況も厳しくなっています。

組合員に「びん牛乳」の「生産奨励金」

生乳価格は、牛乳の流通のしくみとして生産者団体（九州生乳販連など）と大手乳業メーカーの交渉と合意によって一律に決められています。酪農業界の状況を受け、30年ぶりに生乳価格は改定が行われることになり、1kg約4円の値上げが合意されました。しかし、それだけで酪農経営の安定は望めません。牛乳の消費が減少傾向にあることから、国が政策的に生乳生産を減らした結果生産量が減少しています。そのため生産者は飲料用から低い価格の加工用への出荷をせざるを得ず、収入が減っています。さらに原油価格の高騰に伴う光熱、動力費の増加、飼料価格の値上がりなどが追い打ちをかけ、酪農経営を厳しいものとしています。グリーンコープの生産者も例外ではなく、経済的に酪農が継続できなくなつて廃業する生産者も出ています。グリーンコープは、生産者が酪農を継続するためには1kg10円の生乳農家販売価格の値上げが必要であると判断、そのうちの1kg6円の「生産奨励金」を設けることにし、びん牛乳の価格を5月末より改定しました。

酪農生産者と産直関係を つくっていくために

グリーンコープは農畜産物の「産直」をすすめる、生産者が農業を継続していきけるように関係をつくってきました。高齢化が問題となつている農業の現場でもグリーンコープの多くの産地は後継者が育ち、地域ぐるみで農業を続けられる環境が整っています。

酪農生産者との関係についても産直関係をつくることで課題ですが、牛乳流通のしくみの中でグリーンコープは直接酪農生産者から原乳を購入することはできません。これまで特定の酪農生産者を指定し、non-GMO飼料での飼育をお願いしてきました。また、組合員や子どもたちによる交流など相互の関係づくりを行ってきましたが、グリーンコープとしての産直関係はできていません。

今回「生産奨励金」に取り組むことで、酪農生産者との産直関係を積極的につくっていくという新しい段階に踏み込みました。その一歩として、「生産奨励金」を酪農生産者に直接届ける第一回目の贈呈式を実施することができました。

グリーンコープ20周年記念キャンペーンによって全体的な供給状況は前年比約106%（9月現在）と好調です。その中で産直びん牛乳は値上げしたことで、供給金額が前年比約103%と伸びて、本数は約99%まで回復してきました。産直びん牛乳の素晴らしさや「生産奨励金」について広く知らせることで徐々に回復していきます。今後利用拡大に積極的に取り組んでいきます。

牛乳はまさに牛の命そのもの

2008年度第一回酪農生産者交流会

9月12日と13日の両日、グリーンコープからの参加者は、生乳生産者の牛舎を見学し、生産者と交流



びん牛乳 誕生から5年

酪農生産者と共に私 ずっと飲み続

長女が小学生の時、酪農ホームステイに参加しお世話になりました。食べものが作られる生産の現場に触れることができて、とてもよい体験ができました。私も以前、矢野さんのところに伺い、牛は命を削って乳を出しているんだと思いました。偽装など食にまつわる事件が多いのは、生産の現場を知る機会が少ないからだと思えます。秋の取り組みでは利用者を増やすためにがんばります。



グリーンコープ生協
おおいた理事長
奥田 富美子さん

おおさかは設立3年目の一番新しい生協です。若い組合員が多く、小さな子どもを連れてくる姿をたくさん見かけます。転勤族も多く、熊本から来たという組合員もいます。秋のついでにはびん牛乳を若いお母さんたちに大いにアピールして、利用を増やしたいと思います。



グリーンコープ生協
おおさか理事長
中村 富美子さん

**「生産奨励金」は
生産者にとって
大きな意義が
あります**



生乳生産者会委員長
矢野 桂吾さん

8月25日には、グリーンコープの新しい食べもの運動の展開をめざした学習会に参加しました。グリーンコープ連合の片岡専務さんから、今「食」は大変な状況にある、生産者が再生産できる価格というのが大切だという話がありました。まさにそのとおりだと思います。そのことによって「安全」と「安心」はもちろんですが「安定」が確保できます。私たち酪農家にとって、生乳1kgあたり6円という「生産奨励金」は大きな力になります。より多くの方にこの牛乳を飲んでもらうために、生産者も一層努力します。

しました。2日間をとおして、産直びん牛乳を守り育てるために、生産者と組合員が強く手を結びあうことができました。生乳生産者代表の挨拶や単協理事長からのアピール、牛舎見学のように紹介します。

組合員からの元気なアピール



グリーンコープ生協
くまもと理事長
久米田 薫さん

今回「生産奨励金」の贈呈の場をもてたことは意義深いことだと思えます。グリーンコープの生乳産地が、エリア内にある単協として、とてもうれしいことです。グリーンコープの「安心」「安全」は生産者のみなさんの努力があるからだと思えます。今回の交流会で酪農の現状を学び、組合員の思いを生産者のみなさんに伝え、より一層良い関係をめざしたいと思えます。

この秋には、30数カ所でグリーンパティータに取り組みます。どの地区でもびん牛乳の試飲や牛乳を使った簡単なお菓子づくりを行います。新規加入者にも産直びん牛乳のよさを伝えて、予約を呼びかけていきます。取り組みにがんばります。



グリーンコープ生協(長崎)
理事長
高橋 純子さん

小山牧場



小山牧場は、小山さん夫婦と実父の3人で42頭の乳牛を飼育する中堅酪農家です。小山さんは、酪農家の2代目、キャリアは25年です。「10年前乳牛の飼料をnoni-GMOに変えた時、乳脂肪率が下がって、グリーンコープの生乳生産を辞めた人もいました。自分はそれを乗り越えて続けてきてよかったと思いますね。何より価格の安定は助かります。しかし、最近の飼料代の高騰は厳しいです」



飼料からはほんのりと発酵臭がします

「ここ数年の夏の暑さは、大変。牛も暑さで、乳脂肪や乳量が減ります」と小山さん。牛舎の中に置いてあった配合飼料は、生乳生産者代表の矢野さんを中心に仲間数人で共同でつくっています。



桜井牧場

桜井牧場には約83頭の乳牛が飼育されています。桜井さんは酪農をして40年のベテラン酪農家です。数年前から息子夫婦と一緒に働いています。牛舎周辺には1300アールの畑があり、乳牛の糞尿は醗酵させて広大な畑にすきこみ、循環型の酪農に取り組んでいます。飼料用トウモロコシの作付けが中心です。この牛舎で使用する飼料は1年間で約361t。もちろんトウモロコシはnoni-GMOです。

桜井牧場では年間約60頭の子牛が生まれ、一頭の乳牛が出す乳は1日25〜30ℓ、1日も休むことなく、搾乳します。「牛は子牛のために血液を乳に変えるんです。乳はまさに命そのものです。一滴も無駄にはしたくない」と話します。牛舎は清掃が行き届き、臭いほとんどしません。



グリーンコープの生乳を集荷する
ミルクローリー



グリーンコープからの参加者は、4〜5人のグループに分かれ、2日間で10人の生産者の牛舎を訪問しました。牛舎を訪問した組合員は、給餌・搾乳・出荷・清掃・出産・飼育・堆肥づくりなど、酪農家の休むことのない働きに支えられ、産直びん牛乳の原乳が生産されることを体感しました。また、厳しい酪農経営の中で、がんばる生産者のようすを知ることができました。そして、びん牛乳を飲み続けていくことの大切さを改めて胸に刻みました。

共に歩んだ20年



(有)大矢野原農場



大矢野原農場 取締役部長 日永輝夫さん 大矢野原農場 取締役社長 日永ヤス子さん

ヒナは風の通る開放型
鶏舎で健康的にゆった
りと育てられる

何の経験もなく、
知らない土地に
飛び込んだ

28年前、サラリーマンだった

① 暖化がすすんでいるなと感じるんです。大矢野原農場取締役部長の日永輝夫さんはしみじみと言う。以前は冬の対策が大変だったが、最近は鶏たちが夏の暑さから守るための苦労を強いられるようになった。鶏は気温28℃までが限界、30℃になると弱って死んでしまうからだ。そのため夏場は煙霧で鶏舎全体を冷やしてやる。農場の事務所もクーラーなしでは過ごせなくなったという。九州山地の山懷に抱かれた高原に位置する大矢野原農場にも確実に温暖化の影響が及び寄っているのだ。積雪に悩まされた昔がうそのようだとも。

「とにかく地鶏の養鶏をやったかった」と、8種類の地鶏3000羽を育てることからはじめた。しかし、養鶏に関してはズブの素人、その簡単に事がすすむはずはなかった。さつま地鶏をはじめ、ブロイラー種とのかけ合わせなど試行錯誤を続けて、今のブロイラー種に辿り着いた。やっと事業として軌道に乗ってきた時、日

た日永さんは32歳にして一念発起、念願だった養鶏の道をめざした。3ヵ月場所探しのために九州の山を見て回り、最後に偶然駆け込んだ清和農協(熊本県)の紹介で今の土地に出会った。

「借りた桑畑に何の許可も得ないで勝手に鶏舎を作りました」。近所の農家の人たちは、そんなようすを窺いながらも、「まあいいか」と都会からの参入者をおもしろがって見ていくくれた。人々のやさしさや風土の豊かさに、日永さんはこの土地を選んだことに間違いはなかったと確信する。妻と子どもたちが移り住んだのは一定養鶏の形が整ってからだった。

思いが叶って「鶏養い」となった日永さんが心を込めて育て上げる鶏。その鶏を食べてくれる人たちがいなければ養鶏業は成り立たない。豊かな自然環境の中で、安心・安全にこだわって飼育された鶏を求めているのが、グリーンコープ生協ふくおかの前身生協だった。日永さんが養鶏をはじめた頃、その前身生協には

安心・安全を
共につくってきた
仲間がいた

永さんはすでに40歳になっていた。そんな夫に寄り添いながら苦業を共にしてきた現大矢野原農場の社長であるヤス子さんは、「とにかく生活は苦しかったですね。子どもの給食費も払えないくらいでしたから」と、当時を明るく笑い飛ばす。

「グリーンコープになって、生産システムは向上しました。飼育基準はさらに厳しくなりましたけど、『鶏養い』にとっては、その基準をどうクリアしてやり安全な鶏を飼育するか、醍醐味なんです」。そのた

鶏肉と言えば、卵を産み終えた「親鶏」の肉だけだった。「味はともいいのですが、肉が固くて…。安全な若鶏が求められていました」と当時を知るヤス子さんは言う。つくりたい人と食べたい人の思いが合点したから、大矢野原農場はここまで歩んでくることになった。「食べ支えてもらいました」。お互いに求める食べものに関する理念は相通じるものがあり、それは1988年に設立したグリーンコープ連合へと引き継がれた。

鶏の生産と加工という二役を夫婦で担ってきた。「これからのこと？ 今からじっくり考えます」。気負いなく未来を見つめる。

最近手がけたのは、グリーンコープ生協みやぎきの単協開発商品・め若鶏の炭火焼。試行錯誤の結果、機械は使用せず、手焼きで焼き上げるようになった。焼く時の煙は相当なものだという。炭火を調整しながら焼くために食事をする間も惜しんで全力投球するヤス子さんを労う日永さんの眼差しがやさしい。



グリーンコープはこれまで、関係する多くのメーカーや生産者との信頼関係をベースに食べものの安全性を確立させてきました。設立から20年、あるいは設立以前から、共に歩んできたメーカー・生産者をとって見えるグリーンコープを紹介します。

第8回は「安心」と「安全」そして「おいしさ」には定評のある産直若鶏とその加工品を、一貫したシステムで商品化している「(有)大矢野原農場」を紹介します。日永さんご夫婦に話を聞きました。

生きものを育てたい！
思い切ってはじめてた養鶏の道28年は
いつもグリーンコープと共にあった



グリーンコープで取り扱っている大矢野原農場の加工品(一部)

鶏の生産から加工まで一貫した生産システムに安心・安全が見える

グリーンコープ設立以前の取引アイテムは、産直若鶏正肉と、加工品のチキンカツと南蛮漬だけだった。今では、多種類の加工品を製造するようになった。そのために敷地内に併設していた加工工場を2000年に大幅に改築した。その責任者がヤス子さんだ。1992年に解体処理の資格も取っているから、どんなものも加工できる態勢にある。ここで生み出される商品の一つひとつに母親的な細やかさが配られていて食べる人にじっくり伝わる。そんな商品ばかりだ。

め日永さんは日々いろいろなことに挑戦し、研究してきた。科学的な根拠を追求し、データとして蓄積しているという。ただ、そのデータが日永さんの頭の中にあるというのが難点だが、それを今後どう引き継いでいくかが課題であることは日永さん自身が重々意識していることでもある。



グリーンコープ設立20周年記念講演会 グリーンコープかごしま生協主催

GM作物はいらない! の思いを広げよう



講師 天笠啓祐さん
遺伝子組み換え食品はいらない/キャンペーン代表



講師の話に聞き入る参加者

世界のGM作物の栽培面積は拡大を続けている。栽培地はアメリカが全体の半分を占め、ブラジル、アルゼンチン、カナダなど北・南アメリカが中心。しかし、栽培する国が増えていくわけではなく、GM作物の商業栽培がはじまって10年以上になるが、GM技術の応用は未だに除草剤耐性と殺虫性に限られ、対象となる作物も当初から大きく変わっていない。GM作物は収量が多く、干ばつに強いなどと思われがちだが、そうではない。

GM作物を一番たくさん輸入している日本
日本はGM作物の商業栽培はしてはいないものの、GMイネなどは実験的に栽培している。しかし、ほとんど失敗し、開発までには至っていない。しかし日本は最

も多くのGM作物を輸入し、消費している。
ヨーロッパではGM食品はほとんど流通していない。表示制度が徹底し、店頭でGM作物を使った食品かどうかを消費者が容易に判別できるしくみになっている。消費者が買わなければ、メーカーもGM食品を作らない。

日本の表示方法は消費者にGM作物を使った食品かどうか分からない。例えば、「豆腐」は表示義務があるが、GM大豆不使用の場合は任意表示のため、表示されていない場合がある。油の場合もGM作物を使っている表示義務はない。そのため、消費者は選択することが難しくなっている。

GM作物推進企業であるモンサント社はアメリカに本社がある多国籍企業である。GM作物の種子の特許を持ち、販売ルートも押さ

えているため、ほとんど独占状態で、莫大な利益を得ている。
一方、農家にとつてはGM作物はメリットがないと言われている。栽培をはじめた当初はある程度の収量はあがるが、数年のうちに逆転現象が起これ、結果的に収量は減少し、農薬の使用量が増えている。

何より問題なのは、自生GMナタネの調査の結果で分かるように、種子汚染が広がっていることだ。種が風で飛散してしまうことを止めることはできず、交雑や混入が日常化している。

広がるフリーゾーンの取り組み
日本では国の規制が弱いため、北海道や滋賀県などの自治体が、独自の判断で規制のためのガイドラインや条例を設けている。九州地方にはまだ制定している県はない。

世界的にはGM作物を作らないことを宣言したGMフリーゾーン運動が広がっている。日本でも各地の栽培農家や市民の中からGMフリーゾーンの取り組みがすすめられている。みんなで力をあわせて「ストップGMO!」の運動を共にすすめていきたい。

また、ありがとうね。ちゃんぽん
子どもがお腹に入ってから外へ買い物に行くのが辛くなり、また本当に心と体によいものを食べたいと考え、9年前にグリーンコープに入りま

ら案の定「嬉しい、助かるわ」とハイトーンな声の電話が両家からすぐかかってきました。私も試みに食べてみたら、野菜がたくさん入っていてとてもおいしかったです。以来、年末のご挨拶は必ずとグリーンコープの「冷凍ちゃんぽん」になり、今年も両親の「また、ありがとうね」の声を聞くためにそろそろ準備しなくちゃ、と思っています。

グリーンコープ生協おいた
江頭 明子

言い・たい

私の好きなグリーンコープ商品

投稿欄

投稿募集中

- グリーンコープ誕生20年によせて
- 私の好きなグリーンコープ商品

- 400字程度 ●A切 毎月末
- 住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
- 住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561

福岡市博多区博多駅中央街8-36 博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーションワーカーズ連(REN)
「共生の時代」編集部 宛

FAX 092-481-7876

Eメールアドレス rikoho@greencoop.or.jp

2008年9月の組合員数 396941人 (9/25現在)

リユース リサイクル データ 2008年8月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モウルドバック
回収本数 916,857本 回収率 98.7% (7月20日～8月16日回収分)	今月のデータ掲載はありません	回収重量 12,432kg 回収率 54.6%	回収重量 35,660kg 回収率 89.2%

放射能汚染測定結果報告(180)

2008年8月

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。
※は、グリーンコープ連合会取り扱い商品です。

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※ 牛肉	北海道	ND	ND	ND	※ 豚肉	福岡県	ND	ND	ND
※ 牛肉	熊本県	ND	ND	ND	※ カレー粉		ND	ND	ND
※ 鶏肉	山口県	ND	ND	ND	※ 蜂蜜	中国	ND	ND	ND
※ 鶏肉	熊本県	ND	ND	ND	※ 鶏卵	福岡県	ND	ND	ND

グリーンコープがめざす 生活協同組合

グリーンコープ連合の誕生1



1988年3月30日、グリーンコープ連合は誕生しました。
この年、めでたく連合設立となった背景には、共生社が抱えていた1978年に起こった「たがわ生協争議」を解決したことにありました。「この問題は連帯によって解決する。連帯と解決は不可避である」というグリーンコープ連合初代会長故武田桂二郎さんの提言が問題の解決の糸口となりました。「解決が無ければ連帯はできない」と考え、延々と連帯の一步が踏み出せなかった「共生社」と「ちくれん」とつとて、天啓とも見える言葉でした。その考え方に基いて、「共生社」と「ちくれん」が連帯し「たがわ生協争議」という労働争議の解決に向かいました。その過程での経験が、グリーンコープ連合創立の力にもなりました。「連帯は無条件なのだ」という武田さんの言葉に、組合員もまた、それぞれが自己を主張する

自己中心性を取り越えることに気が付いていきます。
九州・山口の25生協、組合員数14万3千人、事業高285億円がグリーンコープ連合設立時の規模でした。その規模と連帯の力は想像を越えるエネルギーを生み出し、それぞれの生協の飛躍へとつながりました。創立総会では「大きな心、やさしい心、広い心で『大きく連帯して小さく動く』」が合言葉となりました。そして、グリーンコープの哲学ともいえる理念「グリーンコープ宣言」が確認されました。この「グリーンコープ宣言」が背骨となって「グリーンコープ」の幅広い視野を育て、普遍的な成長を促してきたのです。
*柳川市で塾や託児所を開設、食べもの共同会を運営しながら、生命の価値を再発見しようと苦闘した哲学者。グリーンコープ連合創立にあたって、普遍的な理念を提言した

グリーンコープ

組合員
ワーカーズ
職員
リリースメッセージ

未来へつなぐ20年 私の思い



グリーンコープの20年という歴史の中を、多くの人、多くのコトが駆け抜けていきました。その一つひとつがグリーンコープの中に刻まれ、グリーンコープの成熟へとつながってきています。この一年間、さまざまな人をおしてグリーンコープの歴史をひもといていきます。
グリーンコープ誕生20周年を記念して、組合員・ワーカーズ・職員からのリリースメッセージを掲載します。

私はほくちく生協（現グリーンコープ生協ふくおか）に育てられました。20数年前、小さい子どもをふたり連れ、地区活動をはじめた頃、生協祭りや拡大チラシ配り、地区総会・料理教室等に参加した私の子どもは大勢の仲間と育って頂きました。今でもその時の方たちに出会った「幾つになっても！歳取るはずね〜」懐かしそうに声を掛けられます。その経験があり、共生社連合としてグリーンコープ連合の連帯を構築する一端にかかわることができたのだと思います。

合成洗剤反対運動（市労連等の企業との連帯）で、多くの労働組合を訪問し連帯を要請。企業組合の中にいる人にとって、自分の考え方だけでは動けない辛さなども垣間見ました。L.L.ミルク反対運動では、日本消費者連盟を中心とした草の根運動との連携で2,000人規模の集会・行進を行いました。その時の日消連事務局の、「これだけ完璧に自分たちの言い分を実行してくれた組織はなかった」との言葉が印象的でした。ネグロスの砂糖の共同購入運動（ネグロスキャンペーン委員

「自分を生かす」「人も生かす」。そんな生き方をグリーンコープから学んだ

NPO法人 集めて使うリサイクル協会代表理事／全国牛乳パックの再利用を考える連絡会（パック連）副代表 和田 志津子

会！現APLAAとの連帯で各単協回りをした。国内運動だけではなく海外との連帯意識の共有化、小さな草の根・パック連との連帯など、さまざまな運動を通して多くの人と出会い、「学び」を貰いました。とりわけ、パック連の初代代表・故平井初美さんとの出会いが私の二度目の新しい運動に踏み出すきっかけとなりました。

グリーンコープにかかわってきた私が頂いた宝物は「ひと」。さらにさまざまな経験と体験は私の人生にとって、何物にも代えがたい財産です。今でもそうですが、私は常に自分で考えて答えを出します。それが間違っていると思われない、間違っていると思いつた時に改めればよいと。人との関係でも、子どもとの関係でも自分の考えたことを伝えます。判断はその人がすることですから。「自分を自由に生かす」「人も生かす」ということは本当に難しいことです。でも、このような考え方・生き方を貫けたのもグリーンコープでの体験が大きいと思います。この経験があり、現在の活動があります。毎年参加する「縁をつむぐ会」は私に、グリーンコープの今の新しい風を！刺激を！与えてくれます。感謝！感謝！20年を迎えたグリーンコープのさらなる躍進を期待します。

グリーンコープになる前の共生クラブ生協（現グリーンコープ生協ふくおか）でのパートが生協へのかかわりはじめていた。創立して間もない当時の職員の働き方はさまざま、組合員の拡大、商品の配達、仕入れ、当時取り扱いが難しいとされていた青物野菜の取り組みなど活発に行われていました。そのような状況に、いつ寝るのかと心配したり、仕事のしすぎと反発したりしていました。しかし、食べものをどう捉え、どのように取り組むか、仕事の合間に聞こえてくる話しあいの言葉は、ずしりと心に響きました。

数年がたち、故武田会長（グリーンコープ連合初代会長）や大勢の方の想いと支援を受け、

それぞれの思いを大きく包むのが「私のグリーンコープ」

ワーカーズ仕出しクラブ 奥平 節子



「仕出しクラブ」を立ち上げましたが、今思えばなんと稚拙だったことか、赤面の思いです。多分知らなかったから、怖いもの知らずでやれたのでしょうか（もしかしら今でもそうかもしれないが）。最初にかかわった時に感じた想いは今のグリーンコープを貫き、先をめざしているように感じます。そしてかわる人を、モノを、育んでいきます。仕出しクラブがそうしてもらったように。

組合員、理事、ワーカー、職員、それぞれのグリーンコープへの想いを大きく包むのが、「私のグリーンコープ」です。今のグリーンコープは、もう一段大きくなりそうです。



グリーンコープが大事にしてきたことを絶やすことなく広げていきたい

グリーンコープ生協ひろしま 専務理事 谷川 大輔

グリーンコープ連合結成の1988年3月、私は埼玉県にある高校に通っていました。この時は、グリーンコープの存在を知らず、その後、愛知県にある大学に進学した時に生協の魅力を知りました。その後、その時々でたくさんの人との縁をたどりながら、1995年にグリーンコープひろしま西部生協（現グリーンコープ生協ひろしま）の職員として入協しました。

組合員さんに「ありがとう」と言われる仕事に誇りと喜びを感じています。例えば、広島市内のある班に配達に行った際に、「先週届いたサーロインステーキが硬かったのよね」と言われたことがありました。「グリーンコープの産直牛肉は〜」と商品特性の説明をしたのですが、その後、そのステー

とつながっている「ことを実感しました。生協の現場は、荷降ろし場所ではなく家庭の食卓なんだ、ということなんです。グリーンコープ生協ひろしまは今年で満15周年を迎えました。そして、グリーンコープに20年前から残っているモノは少なくなつて

これからバトンを渡す人、そしてまたバトンを受け取る人、そしてまたバトンを渡していく。グリーンコープが大事にしてきたことを絶やすことなく、今グリーンコープにかかわっているすべての人たちと共にグリーンコープの運動を広げていきたいと思っています。

これも、20年前に設立しようとして購入されたことを知りまして、楽しいはずの誕生日の食卓に「このステーキ硬いね〜」という会話になっていたことを思い、すぐにその組合員さんに連絡をしました。そのことを今でも教訓にしています。生協の仕事は、「食卓

いても、20年前に設立しようとして購入されたことを知りまして、楽しいはずの誕生日の食卓に「このステーキ硬いね〜」という会話になっていたことを思い、すぐにその組合員さんに連絡をしました。そのことを今でも教訓にしています。生協の仕事は、「食卓